

注連引原遺跡

SHI ME HIKI HARA SITE

1 9 8 7

群馬県安中市教育委員会

序

安中市は群馬県の西部に位置し、碓氷川の流れに沿って田園風景の広がる緑豊かな町です。また交通の要路として古くから発展してまいりました。こうした状況のなかで、安中市の重要事業の一つとして市営斎場の建設が進められることになりました。市営斎場建設は以前から市民の要望も強く、安中市民にとりましては積年の願いでありました。

しかし建設予定地内に遺跡の存在することが判明しましたので、あらかじめ発掘調査を行い、遺跡の範囲を確認することになりました。そして群馬県教育委員会より埋蔵文化財専門職員派遣のご協力をいただき、発掘調査を実施いたしました。その結果、縄文時代、弥生時代を中心とする遺跡が存在することが明らかとなりました。

安中市中野谷地区は遺跡が多く、今までも貴重な資料が発見されております。遠い昔より人々の生活が連続と培われてきた豊かな土地です。今回はじめてこの地域で発掘調査が行われ、その一部が解明されました。こうした資料は地域の歴史の研究資料であることはもちろんですが、地域の社会教育、学校教育の中で生きた教材として幅広く活用をはかってゆきたいと思えます。

おわりに、御協力いただいた地元の方々、発掘調査に従事した作業員の方々、御指導、御協力いただいた関係各機関の方々には厚くお礼申し上げます。

昭和62年3月

安中市教育委員会

教育長 多胡純策

例 言

- 1 本書は安中市が建設する市営斎場「すみれヶ丘聖苑」建設予定地内に存在する注連引原遺跡（略称G-1）の範囲確認調査の報告書である。
- 2 発掘調査は昭和59年度文化財保護国庫補助金、県費補助金を受けて安中市教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査は2次にわたって実施した。1次調査は昭和59年12月15日より12月26日までの12日間行い、2次調査は昭和60年3月4日より3月26日までの20日間行なった。遺物整理は昭和61年5月6日より昭和62年3月20日まで実施した。
- 4 発掘調査は群馬県教育委員会より職員の派遣を受け、1次調査、2次調査とも県教育委員会文化財保護課能登健、洞口正史が担当した。
- 5 遺物整理は安中市教育委員会社会教育課大工原豊が担当し、本書の編集も大工原が行なった。
- 6 本書の執筆は主として大工原が行ない、縄文時代の土器は中島誠（明治大学学生）が行なった。また弥生時代の遺物については若狭徹氏（群馬町教育委員会）に多大なる御指導、御助言をいただき、それによるところが大きい。
- 7 遺物の実測は大工原、千田茂雄（調査員）、中島、小島タミエ、吉沢秀子、和田宏子が行ない、遺構・遺物のトレースは小川正子、大工原、中島、吉沢が行なった。
- 8 本遺跡の出土遺物は安中市教育委員会で保管している。
- 9 発掘より報告書作成に至るまで次の方々に御指導、御協力をいただいた。ここにお礼申し上げます。（敬称略）

荒巻実 小野和之 及川良彦 加部二生 小島純一 古郡正志 前原豊

10 調査組織

社会教育課長	須賀清之（昭和60年3月転出）	群馬県教育委員会文化財保護課
	茂木勝文	主任 能登健
社会教育係長	中島秀一（昭和60年3月転出）	文化財保護主事 洞口正史
	反町良一	（発掘調査担当）
主任（社教主事）	森泉寿義雄	
主任	吉田洋（昭和60年3月転出）	
主任	松本豊	
主任	萩原昭	
主事	大工原豊（遺物整理担当）	

凡 例

- 1 遺物は $1/3$ 、 $1/6$ を基本としたが、小型石器については $2/3$ とした。
- 2 石器は石材により次のように分類した。石材A類：黒曜石、チャート、硬質頁岩等石鏃、スクレイパーの素材となる鋭利な石材。石材B類：頁岩等打製石斧、スクレイパーの素材となるやや粘度をもつ石材。石材C類：安山岩、砂岩等磨石、凹石、砥石などの素材となる粗面で剝片剝離には適さない石材。石材D類：結晶片岩系の石材。

目 次

本文目次		第4図 B区全体図	6
		第5図 Y-1号住居址実測図	8
序		第6図 縄文時代前期前半の土器群の分布	10
例言		第7図 縄文時代前期後半の土器群の分布	10
凡例		第8図 縄文時代中期の土器群の分布	11
目次		第9図 原石(石核)、剥片の分布	11
		第10図 石材A類、B類石器の分布	13
I 調査に至る経過	1	第11図 石材C類の分布	13
II 調査の経過	1	第12図 縄文土器(1)	14
III 調査の方法	2	第13図 縄文土器(2)	15
IV 遺跡の地理的、歴史的環境	2	第14図 縄文土器(3)	16
V 基本層序	4	第15図 石器(1)	19
VI 遺構と遺物	6	第16図 石器(2)	20
1 遺構	6	第17図 石器(3)	21
2 遺物	7	第18図 弥生時代の土器群の分布	22
(1) 縄文時代の遺物	7	第19図 弥生土器(1)	24
a 遺物の分布	7	第20図 弥生土器(2)	25
b 土器	12	第21図 弥生土器(3)	26
c 石器	17		
(2) 弥生時代の遺物	22		
a 遺物の分布	22	図版目次	
b 土器	23	図版-1 調査状況 Y-1号住居址	
VII 成果と問題点	27	図版-2 遺物出土状況 黒曜石出土状況 弥生土器出土状況	
挿図目次		図版-3 縄文土器	
		図版-4 石器	
第1図 注連引原遺跡と周辺関連遺跡	3	図版-5 弥生土器(1)	
第2図 基本層序模式図	4	図版-6 弥生土器(2)	
第3図 調査区全体図	5		

I 調査に至る経過

安中市は近年人口が増加しつつあり、公共施設についても充実をはかるよう努めてきている。その一つに市営斎場の建設がある。市営斎場を建設することは安中市にとって積年の課題であった。そして昭和60年度に安中市 中野谷字注連引原に市営斎場を建設することになった。建設予定地はこれまで中野谷地区の共有林で、雑木林であった。そして遺跡の存在についてもほとんど確認されていなかった。

ところが建設予定地内から縄文時代の遺物が発見されたことから、この場所に遺跡が存在する可能性があることが判明した。そこで市教育委員会は市建設部、市民部と対応方法について協議を重ねた。しかし斎場を建設することは安中市にとって懸案であり、斎場予定地を変更することも不可能であると考えられたので、建設に先立ち事前に遺跡の範囲確認調査を実施することになった。そして調査には群馬県教育委員会より、埋蔵文化財専門職員を派遣してもらい、国庫補助金の交付を受けて実施することになった。

II 調査の経過

本遺跡の範囲確認調査は二次にわたって行なわれた。1次調査は昭和59年12月15日より12月26日までの12日間実施した。当初遺跡の位置および範囲が漠然としていたため建設予定地全域にトレンチを設定して調査を行なった。

しかし1次調査では遺物は検出されたが、遺構の確認はトレンチ調査では困難であった。そこで調査によって得られた遺物を検討し、ある程度遺跡の性格を把握した後、再度調査を実施することにした。その結果、調査対象地域内に縄文時代前期および弥生時代中期の遺跡が存在することが判明した。

それをうけて2次調査は遺物のまとも出土した部分を面的に拡張して遺構、遺物の分布の範囲を確認することにした。2次調査は昭和60年3月4日より3月26日までの20日間にわたって実施した。2次調査では縄文時代前期の遺物包含層と弥生時代中期の住居址およびピットの存在を確認した。そして調査の結果、建物建設予定区域内には遺跡の範囲が及ばないことが明らかとなり、遺跡の範囲は斎場建設予定地外へ延びていることが判明したので工事の実施を許した。

遺物整理は昭和61年5月6日より昭和62年3月20日までの間、断続的に行なった。

Ⅲ 調査の方法

調査は遺跡の範囲を確認することを目的として実施した。1次調査では斎場建設予定地全域に原則として10m毎に幅2mのトレンチを設定した。トレンチはほぼ東西方向に10本設定し、北から順に1～10トレンチとした。9トレンチおよび10トレンチについては雑木林の都合で傾いて設定した。

調査はバックホーで表土を掘削した後、人力で遺構、遺物の確認作業を実施した。遺構の確認面はⅢ～Ⅴ層上面であったが、遺物は出土しても遺構については確認することはできなかった。

2次調査は前回の調査で遺物の多く検出された9、10トレンチを中心として面的に遺構の存在を確認することにした。グリッドは5m×5mとし、南西隅を基点としている。西より東へA、B、C……とアルファベットで呼び、南から北へ1、2、3……と算用数字で呼称することとした。また各グリッドを四分割し、2.5m×2.5mの細グリッドを設定した。細グリッドの呼称は北西隅より時計回りで1、2、3、4である。遺物の取上げは原則として細グリッド単位で実施した。なお調査区域内を通る道路を境として、東側をA区、西側をB区とした。

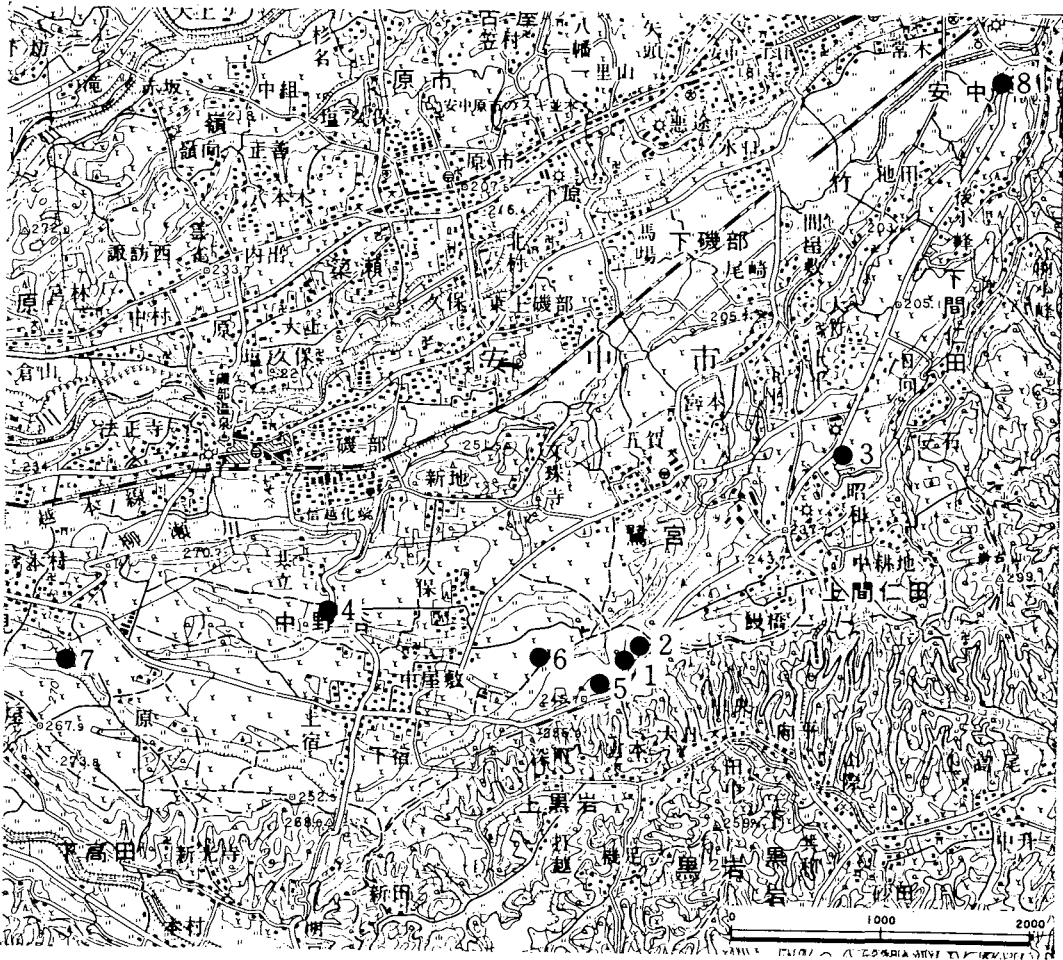
2次調査はバックホーによりⅢ層上面まで掘削した後、遺物包含層であるⅢ層を人力によってⅣ層上面まで掘り下げ、遺構の確認作業を行なった。A区ではⅣ層上面において遺構の存在が確認されたので、遺構の精査を実施した。しかしB区については遺構が検出された北部を除き、千鳥に4m×2mの深掘りをⅣ層中位まで行なったが、遺構は検出されなかった。また検出された遺構については測量、写真撮影を実施して記録を行なった。

遺物整理は遺物の水洗・注記→接合・復元→実測・拓本→トレースの順で行ない、並行して遺構図面の整理・作成、トレース、遺物台帳作成、写真整理を行なった。

Ⅳ 遺跡の地理的・歴史的環境

注連引原遺跡は群馬県安中市中野谷字注連引原 3637-1番地、3638-1番地に所在する。

ここは碓氷川上位段丘の最南端にあたり、なだらかな丘陵性の地形をなしており、標高は241～243mである。遺跡より北方は碓氷川上位段丘のなだらかな台地が広がっており、遺跡のすぐ下を猫沢川が東流する。一方南側は鐺川の支流星川によって浸食され、複雑に谷が入り込んでお



第 1 図 注連引原遺跡と周辺関連遺跡

1. 注連引原遺跡
2. 注連引原(Ⅱ)遺跡
3. 道前久保遺跡
4. 天神原遺跡
5. 下原遺跡
6. 中原遺跡
7. 上人見遺跡
8. 三本松遺跡

り、険しい山地帯となっている。遺跡からは富岡市上黒岩の集落が眼下に眺望でき、比高差は約 70mほどある。

そして、遺跡は小高い丘陵の西側斜面にあたり、その西側には南北に谷が入り込み、細くくびれている。またこの丘陵の東側にも南北に谷が入り込んでくびれており、独立丘陵的な地形を呈している。昭和61年度に調査を実施した注連引原(Ⅱ)遺跡はこの丘陵の頂上部より東側斜面にかけての部分にあたり、ここからは弥生時代中期の遺構、遺物が検出されている。このことから遺跡の範囲はこの「独立丘陵的」な部分を囲むように存在し、一部は富岡市上黒岩まで及んでいると推定される。今回調査を実施したのは遺跡の中心部より西側の部分であるとみられる。

注連引原遺跡の周辺の遺跡について概観すると、この周辺には縄文時代より平安時代に至るま

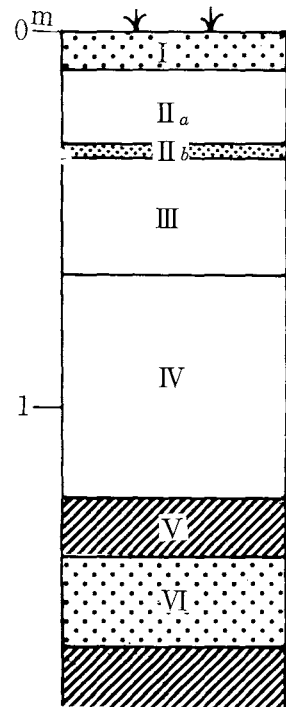
で連綿と続いて多数の遺跡が存在する。昭和61年度にこの遺跡の周辺（中野谷、鷺宮地区）の遺跡詳細分布調査を実施しており、詳細については後日明らかとなる。

本遺跡では縄文時代前期と弥生時代前期終末の遺構、遺物が検出されているが、ほぼ同時期の遺跡についてみてゆくことにする。まず縄文時代前期の遺跡では本遺跡の北東約2kmの位置に道前久保遺跡(3)があり、昭和60年度に調査が行なわれ、縄文時代前期後半の住居址5軒が検出されている。また縄文時代晩期の遺跡では西方約2kmに天神原遺跡(4)がある。そして弥生時代中期初頭の遺跡としては付近には下原遺跡(5)、中原遺跡(6)が存在する（新井・小野 1985年）。やや離れたところでは西方約3.7kmに上人見遺跡(7)、北東4.5kmに三本松遺跡(8)が同時期の遺跡として存在する。

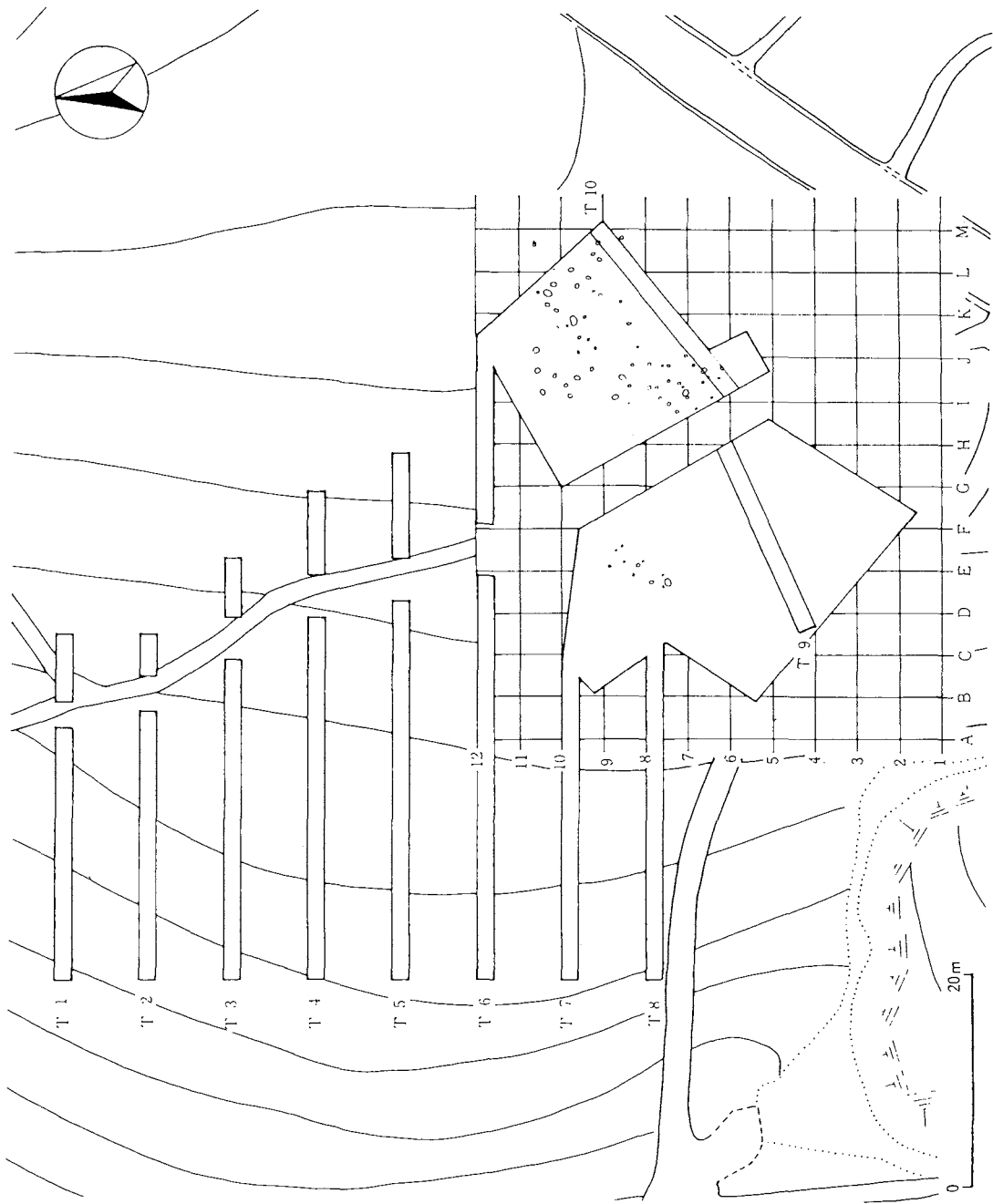
V 基本層序

注連引原遺跡では西側ほど層が厚くなる傾向がある。基本層序は次のとおりである。

- I層 灰白色軽石層 浅間A軽石（As-A 1783年）純層。
表面の一部は土壌化している。
- IIa層 黒色土層 As-Bを多量混入する。粘性はほとんどない。
- IIb層 灰褐色軽石層 浅間B軽石（As-B 1108年）純層。
全面にはなく部分的に存在する。
- III層 黒色土層 粘性はややあるが、しまりは弱い。
縄文時代、弥生時代の遺物包含層。
- IV層 褐色土層 粘性、しまりともある。弥生時代の遺構の地山である。
- V層 黄褐色土層 粘性、しまりとも強い。これより下層はローム層である。
- VI層 黄灰色軽石層 板鼻黄色軽石層（As-YP 1.3万年前）



第2図 基本層序模式図



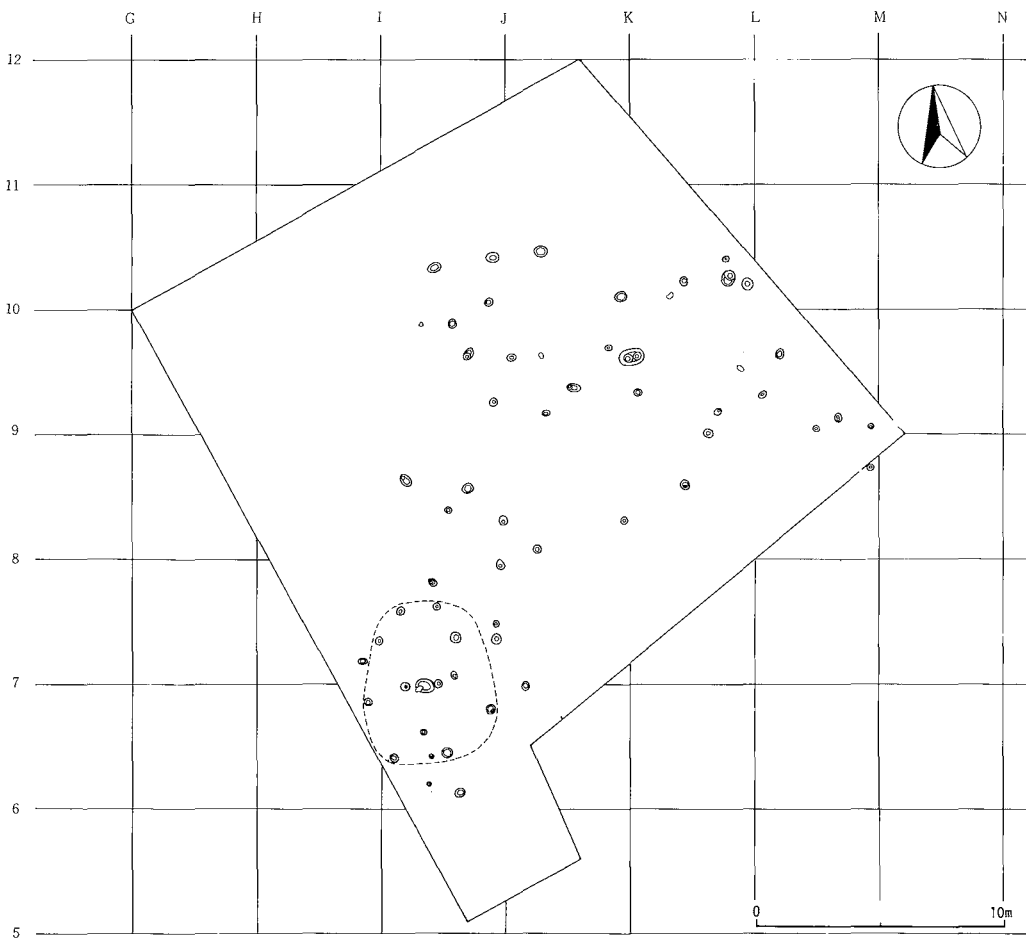
第3図 調査区全体図

Ⅵ 遺構と遺物

1 遺構

遺構の概要

今回の調査では土層に特徴がなく、遺構の検出が困難であった。遺構はⅣ層上面で確認されるが、遺物の多くはすでにⅢ層中より出土してしまう状態であった。そのため住居址の場合は堅穴



第4図 B 区 全 体 図

の壁を検出することができず、柱穴と炉址のみを検出することができた。調査によって検出された遺構としては、弥生時代の住居址1軒と約50の時期不明のピットがある。

Y-1号住居址（第5図）

この住居址はA区の南西隅、H-6・7、I-6・7グリッドに存在する。平面形は壁が確認できなかったので判然としないが、柱穴の配置から長さ6～7m、幅5～6mの隅円方形ないしは長楕円形を呈すると推定される。柱穴は長軸に沿って対となるように6本配列するほか、左右に各2本ずつ計4本がやや配列するように存在する。またそれ以外にも数基のピットが住居址の範囲内に存在する。炉址は長軸約90cm、短軸約60cmの楕円形を呈し、南西部分に比較的大きな炉石が1個配置されている。住居址および周囲から検出される遺物から弥生時代前期終末の住居址とみられる。

ピット（第4図）

Y-1号住居址のほかにも多数のピットが検出されている。これらのピットの所属時期については判然としないが、その多くは弥生時代の遺構と推定される。

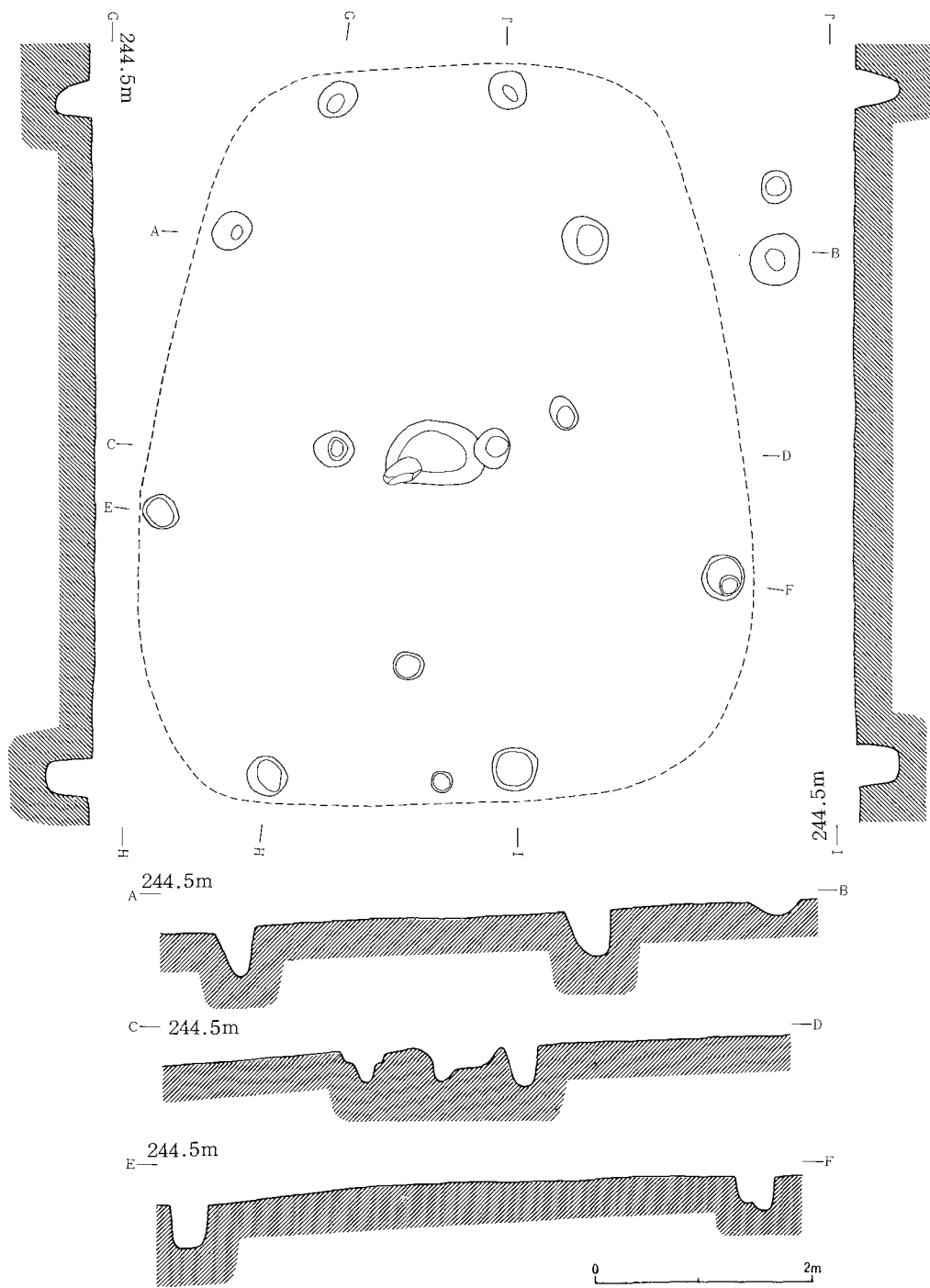
A区のピットについてみると、Y-1号住居址以外では北半部分にピットがほぼ円形にまとまる部分が2箇所存在する。これらのピット群にはY-1号住居址にみられた炉石のような河原石が円内に存在している。炉址については確認されていないが規模的にもY-1号住居址と同じ程度であり、また弥生時代の遺物もこの部分に濃密に分布する。そして遺構の確認が困難な土層であることを総合的に判断すると、これらのピット群が弥生時代の住居址である可能性がある。

一方B区についてみると、北の部分にピットがまとまる。これらのピットについては規模も小さく、遺物の出土状態をみても特に偏在する時期もないことから、所属時期および性格については不明である。

2 遺物

(1) 縄文時代の遺物

a 遺物の分布



第5图 Y—1号住居址实测图

縄文時代前期前半の土器の分布（第6図）

胎土に繊維を含む土器群で、この段階のものが縄文時代の土器の中で最も多く検出された。この土器群はさらに花積下層期と関山期に大別される。

花積下層期の土器群についてみると量的にはさほど多くはないが、B区の中央部に集中しており、A区には少量分布するのみである。

一方関山期の土器群はA区を中心に広範に分布する。分布の中心はA区の南東部にあり、さらに調査区外へも広がるものとみられる。またB区には少なく、花積下層期の土器群の東側にまとまる傾向がある。このように花積下層期と関山期では分布域を異にしていることがわかる。

縄文時代前期後半の土器の分布（第7図）

縄文時代前期後半、諸磯a、b、c式に属する土器群は量的には少量であり、A区、B区とも散漫に分布し、特にまとまる傾向はみられない。

縄文時代中期の土器の分布（第8図）

縄文時代中期の土器も量的には少なく、主体となるのは中期後半、加曽利E式の土器群である。分布の傾向をみるとA区の中央部およびB区の中央部にやや偏在する傾向がある。

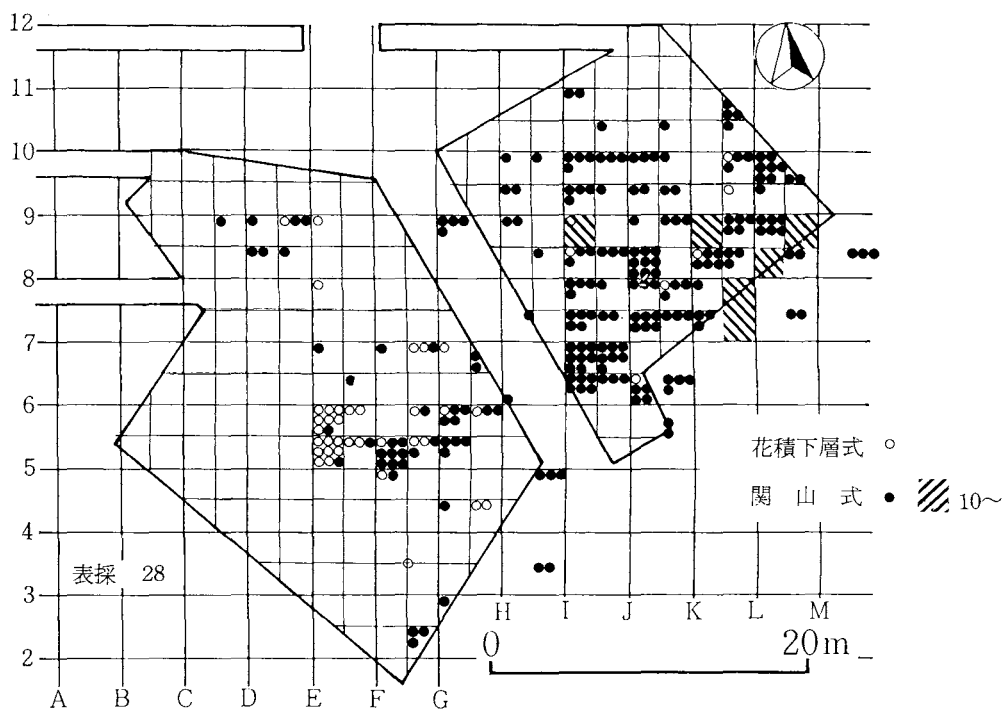
石器の分布（第9図 第10図 第11図）

石器は縄文時代に属するものと弥生時代に属するものが混在しており、明確に分離することができないので一括して扱うことにする。

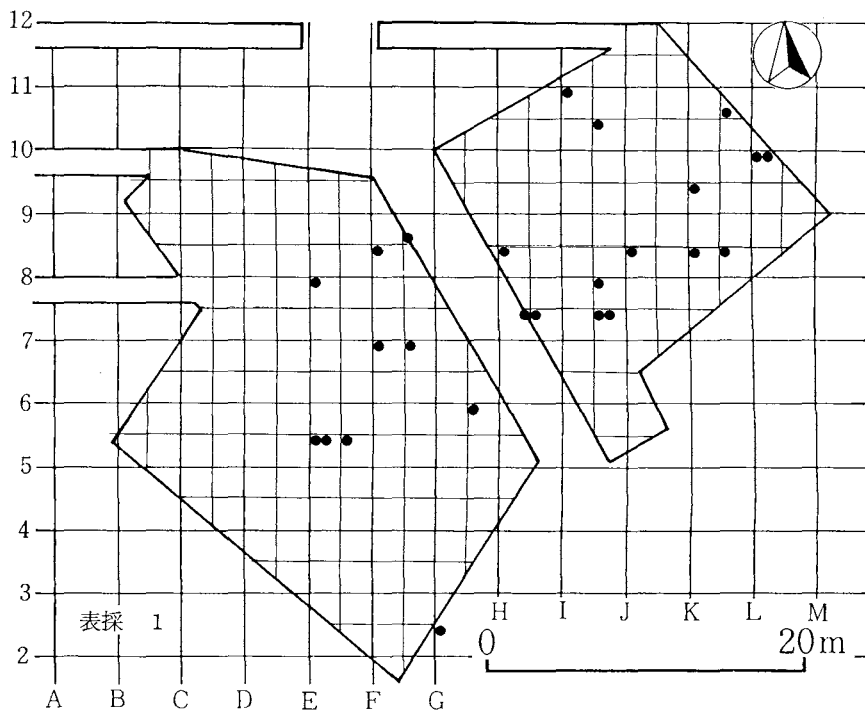
剥片類の分布をみると、まず石材A類の剥片はA区では中央部分にまとまる傾向がある。一方B区では東側に偏在する傾向がある。また石材別にみるとA区では黒曜石とチャートが混在するのに対しB区ではチャートが偏在している。そして黒曜石の原石が多数出土しているが、これらはA区の南部からB区の東部にまとまって存在している。

また石材B類の剥片は多量出土しておりA区では全体に広がっている。またB区では中央部南側に集中している。一方石核は特にまとまる傾向はみられず、散在している。

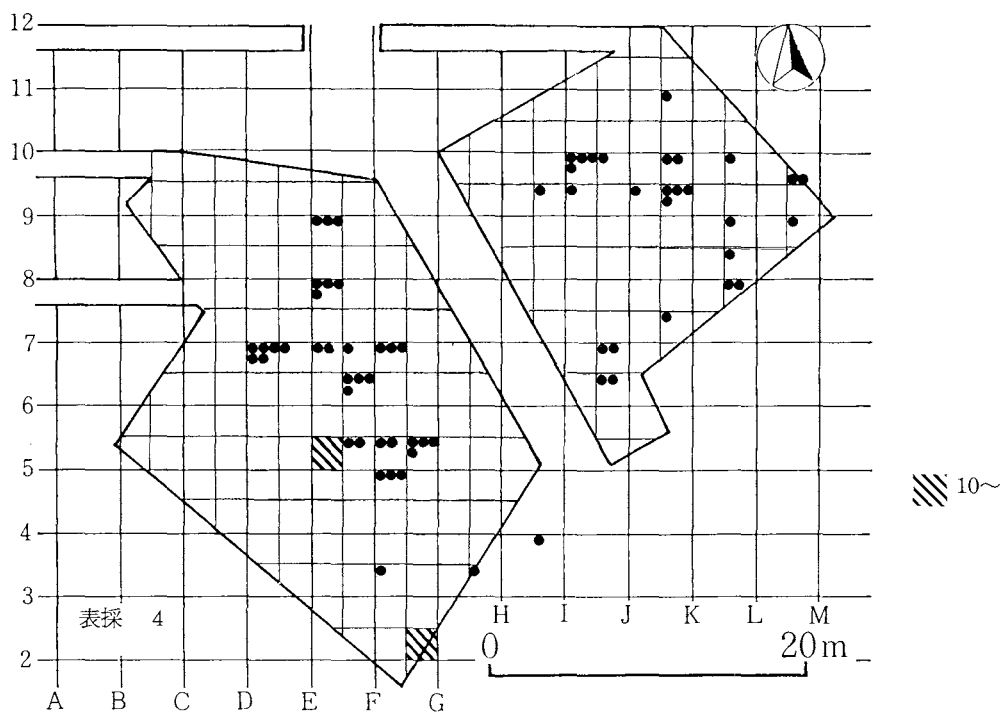
次に狭義の石器の分布では石鏃は弥生時代の所産であると考えられる凹基有茎鏃と突起を有する凹基無茎鏃はB区中央の同一場所より検出されており、弥生土器の分布と一致する。次にスク



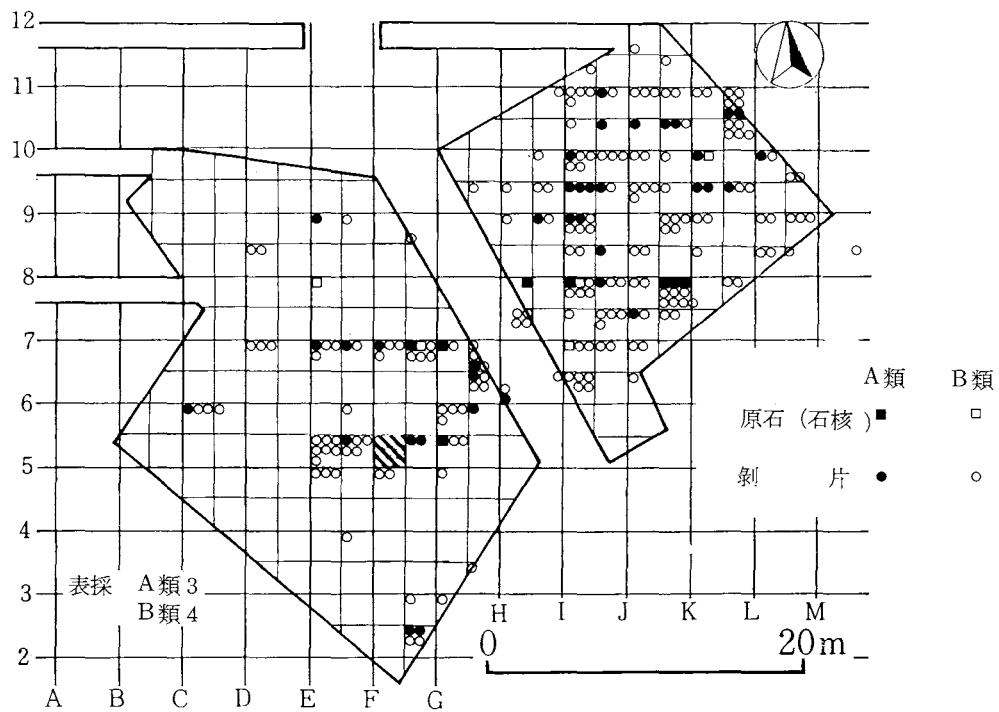
第6図 縄文時代前期前半の土器群の分布



第7図 縄文時代前期後半の土器群の分布



第8図 縄文時代中期の土器の分布



第9図 原石(石核)・剥片の分布

レイパーについてみると、石材A類のものは2点でA区のみ存在する。またB類はA区南東部分にまとまる傾向がみられる。

打製石斧ではA区北側に撥形を呈するものが集中する部分が存在する。そしてA区南東部分には撥形と短冊形が併存する集中部分が2箇所存在する。一方B区でも中央東寄りに同様な集中区が存在する。しかし弥生時代の石鍬の可能性を有するものは特に偏る傾向は見い出せない。

敲石、台石については数が少なく傾向を見い出すことができない。また砥石はA区南側へややまとまっている。

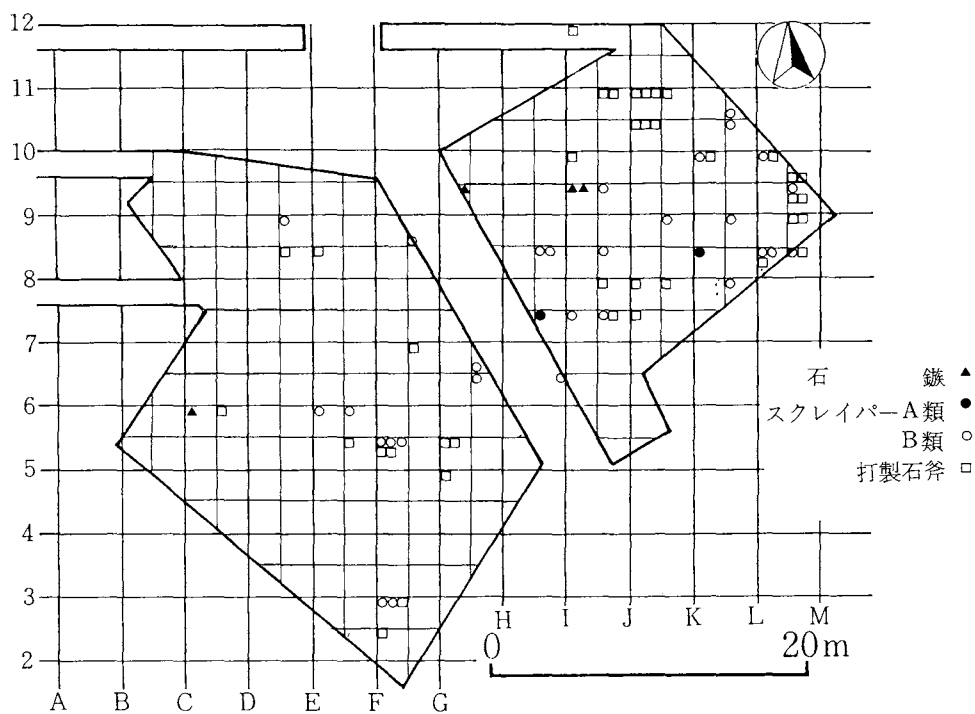
凹石についてみると、集中して出土する傾向があり、B区中央部分、A区南側に集中区が存在する。そしてB区の集中区の場合、形態もすべて同一で楕円形を呈している。また磨石も同様に集中して出土する傾向があるが、凹石とは分布域を全く異にする。A区南部および南東部に集中区がみられる。しかしB区には全く存在しない。これまで凹石と磨石は同一の器種で、機能、用途も同じものと考えられてきたが、このような分布状況から別器種である可能性がある。また石皿はB区北部より1点出土したのみであり、凹石、磨石との結びつきについては明らかではない。

これら石器群と土器群との関係や石器群相互の関係についてははっきりしない部分が多いが、今後とも留意する必要があるとみられる。

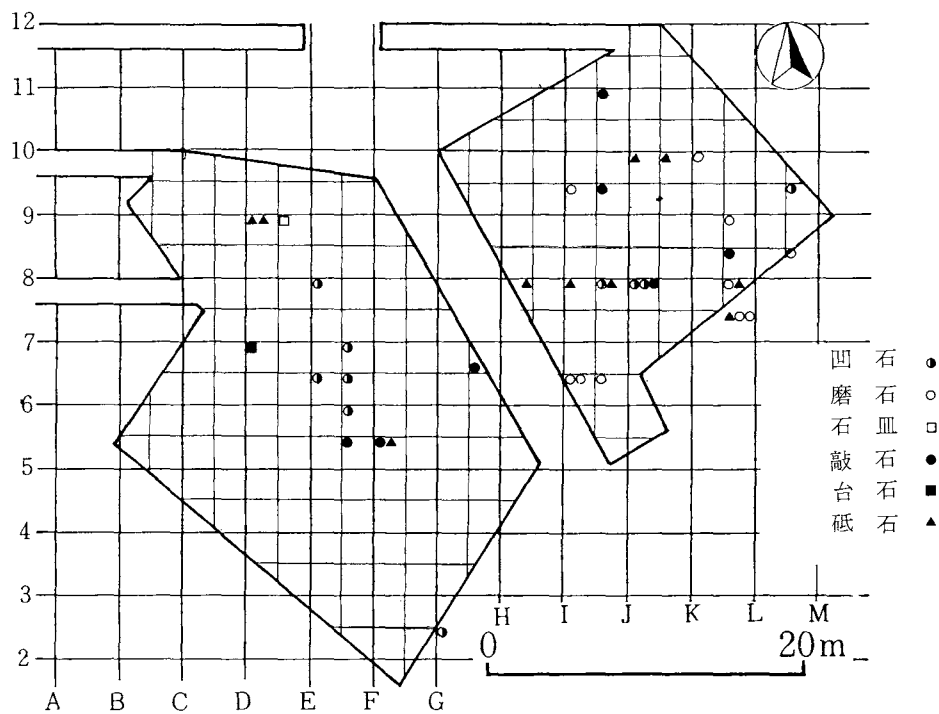
b 土器 (第12図 第13図 第14図)

1~45は、縄文時代前期前半の土器であり、花積下層式と関山式に区分される。1~13は、花積下層式に属する土器である。1は、口縁部片で、口縁部に沈線を横位に施文し、口縁及び沈線内部に捺糸の押圧を施す。2は、口縁部片で、単節の羽状縄文を施す。3は、口縁部片で、無節の縄文を施す。4・7・9・13は、胴部片で、太めの捺糸文を施す。5・6・8・10・12は、胴部片で、細めの捺糸文を施す。11は、尖底土器の底部片である。

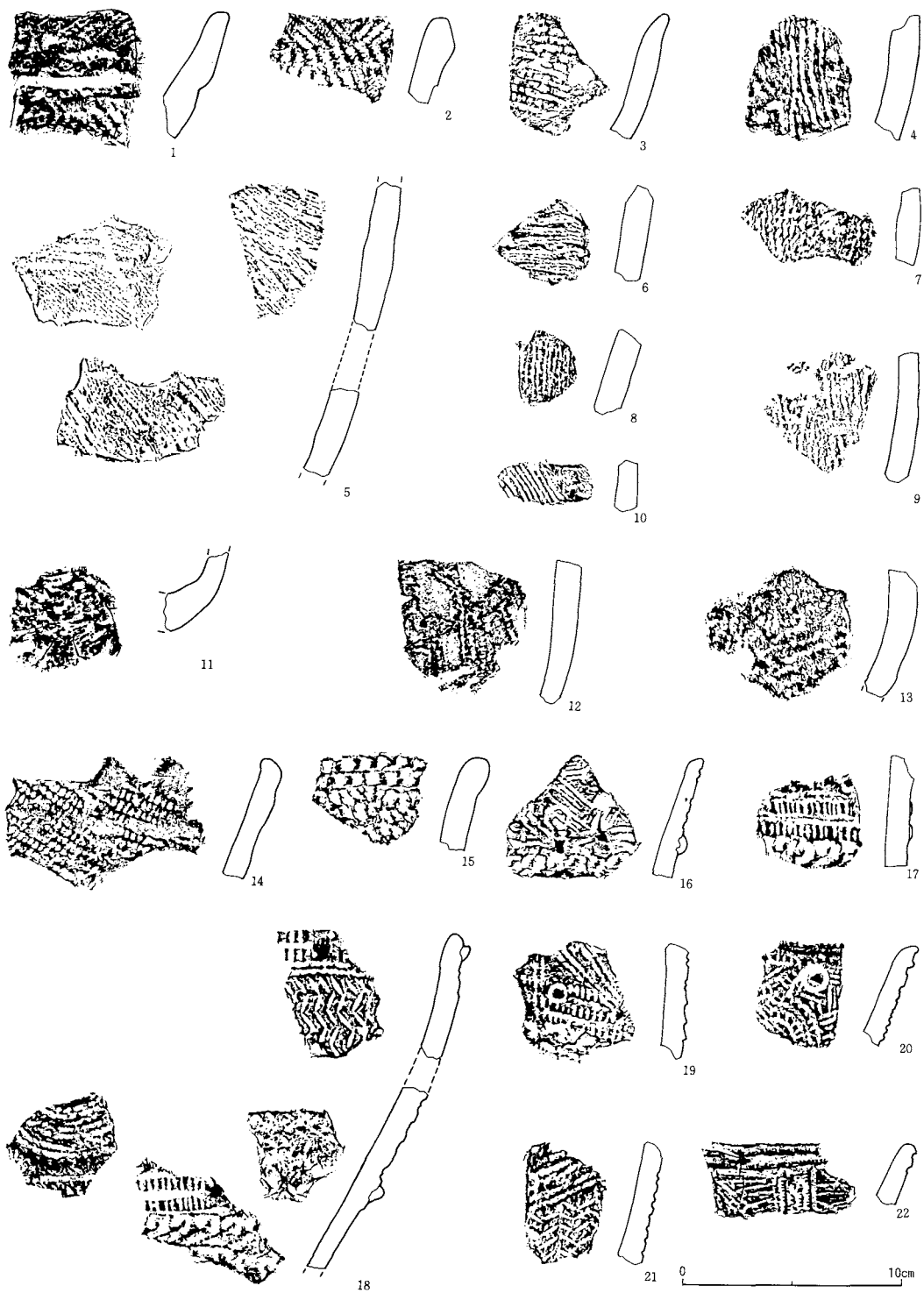
14~45は、関山式に属する土器である。14は、口縁部片で、口縁部に内彎する2つの突起をもち、単節の縄文を施す。15~36は、ループ文を施す一群で、15は、口縁部片で、口縁に棒状具による2条の連続刺突文を施す。16は、胴部片で、円形貼付文、円形竹管文、半截竹管による平行沈線文を施す。17は、胴部片で、紐状の貼付文に刻みを施し、捺糸の押圧を施す。18・21は、口縁部片・胴部片で、丸棒状具による矢羽根状の刺突文、円形貼付文、捺糸の押圧による渦巻文、円形竹管文、紐状の貼付文に刻みを施す。19は、胴部片で、円形貼付文、円形竹管文、捺糸の押圧、棒状具による3条の連続刺突文を施す。20は、口縁部片で、円形竹管文、捺糸の押圧、丸棒状具による沈線文、紐状の貼付文に刻みを施す。22は、口縁部片で、円形貼付文、円形竹管文、棒状具による沈線文、紐状の貼付文に棒状具による連続刺突文を施す。23~26・29は、口縁部片



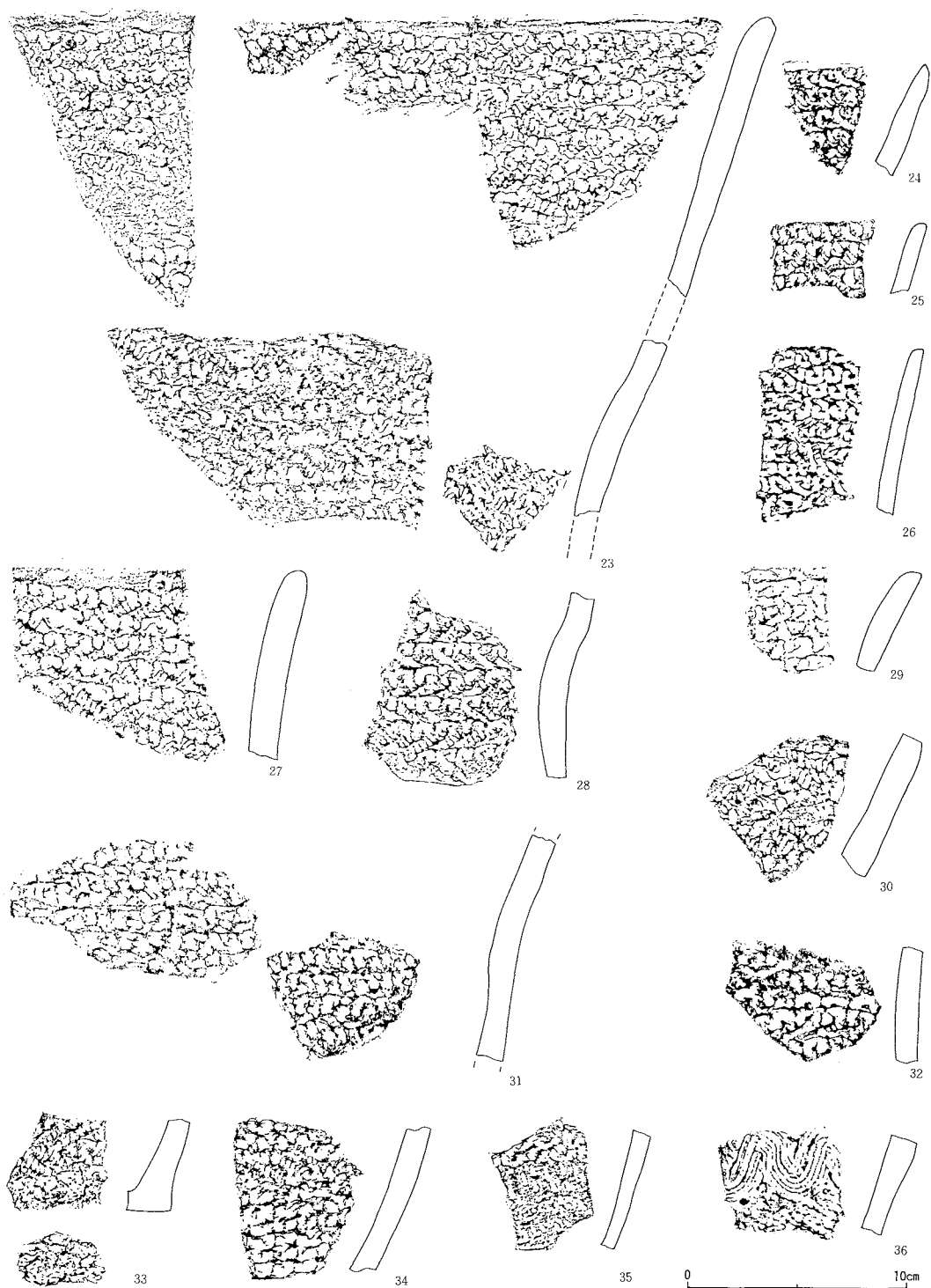
第10図 石材A類・B類石器の分布



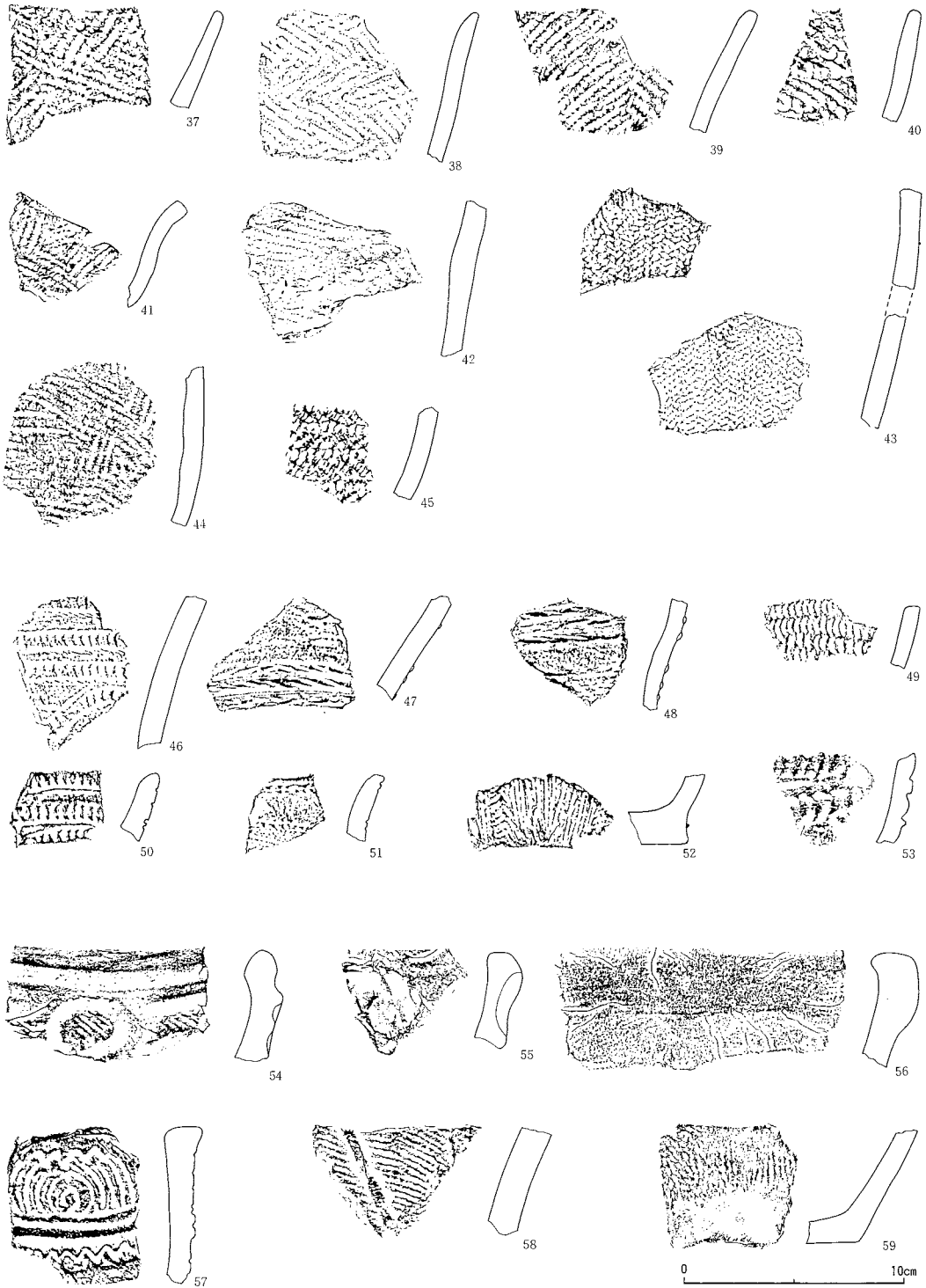
第11図 石材C類石器の分布



第12図 繩文土器(1)



第13圖 繩文土器(2)



第14図 繩文土器(3)

で、全体にループ文を施す。27は、口縁部片で、口縁部に円形竹管文、全体にループ文を施す。28・30～32・34・35は、胴部片で、ループ文を全体に施す。33は、底部片で、胴部・底面にループ文を施す。36は、胴部片で、ループ文を施した後に、櫛状具でコンパス文を施す。37・39は、口縁部片で、単節の羽状縄文を施す。38・42は、口縁部片で、無節の羽状縄文を施す。40は、胴部片で、単節の縄文を施した後に、ループ文を施す。41・45は、胴部片で、単節の羽状縄文を施す。43は、胴部片であり、組紐文を施す。44は、胴部片で、単節の縄文を施す。

46～53は、縄文時代前期後半の土器である。46・50は、諸磯a式に属する土器で、46は、胴部片・50は、口縁部片で、半截竹管による連続爪形文を施す。47・48・51は、諸磯b式に属する土器で、47・48は、胴部片で、単節の縄文を施した後、浮線文に丸棒状具による刻みを施す。51は、口縁部片で、半截竹管による平行沈線文と爪形文を施す。52は、諸磯c式に属する土器であり、底部片で、半截竹管による沈線文と矢羽根状の刺突文を施す。49は、口縁部片・53は、胴部片で半截竹管による連続爪形文を施す。

54～59は、縄文時代中期後半の土器であり、加曽利E式に属する土器である。54は、口縁部片で、太い隆線文と太い沈線文を施した後、単節の縄文を施す。55は、口縁部片で、太い隆線文を施し、太い沈線による渦巻文を施す。56は、口縁部片で、口縁が内彎し、赤色の塗彩を施す。57は、口縁部片で、細い2条の隆線文、棒状具による沈線の渦巻文・鋸歯状文を施す。58は、胴部片で、単節の縄文を施した後、細い隆線による懸垂文を施す。59は、底部片で、撚糸文を施す。

c 石器 (第15図 第16図 第17図)

今回の調査によって出土した石器は第1表のとおりである。器種組成については各時代の石器が含まれており、時期的に限定することはできない。しかし石器の形態や分布状態から縄文時代前期に属するものが多いと考えられる。また弥生時代の石器としては石鏃と石鋏が存在する。

1～4は石鏃である。1は凹基無茎鏃である。2、3は有茎鏃である。2は凸基で茎のつけ根の部分の磨いている局部磨製石鏃である。局部磨製石鏃は凹基無茎鏃が一般的で、縄文時代後期から晩期にかけて存在する。3は凹基で小型のものである。また4は凹基無茎で、側縁部に突起を有し縄文時代晩期に出現する「五角形鏃」の範

石材	器種	数量
A類	石鏃	5 (4)
	スクレイパー (A類)	3
B類	〃 (B類)	30
	打製石斧 (石鏃)	32 (6)
C類	石皿	1
	凹石	10
	磨石	11
	台石	1
	敲石	7
	砥石	10
	計	110

第1表 石器組成表

疇に含まれる。石材は4はチャートで、他は黒曜石である。これら石鏃のうち1は時期的に限定することはできないが、2～4は弥生時代に属する可能性が高い。

5～20は打製石斧である。5～9、13は撥形を呈する小型のものであり、縄文時代前期に多い形態である。13は刃部が他のものと異なっており、石斧以外の器種の可能性がある。14は幅広の撥形を呈するものである。これら撥形を呈するものには刃部磨痕はほとんど観察されない。10～12、15～18は短冊形を呈するものである。10は厚手で刃部がはっきりしないので、未成品の可能性はある。12、15、16には刃部に磨痕が観察される。またこの形態では欠損の頻度が高い。撥形石斧とは対照的であり、機能が異なっているためと考えられる。19、20は撥形を呈する大型のものである。いずれも欠損しているが、弥生時代の石鏃と推定される。刃部磨痕は顕著である。20は火を受けて表面が剝落している。打製石斧は大部分が頁岩を用いている。

21は石材A類を素材とするスクレイパーである（スクレイパーA類）。先端は尖頭状を呈しており調整は両側縁部に施される。石材はチャートである。22～26は石材B類を素材とするスクレイパーである（スクレイパーB類）。22は折断剥片を素材とし、両側縁に刃部を作出している。刃部は直刃で薄い。23は一側縁に片面調整で刃部を作出しており、曲刃で薄い。24も同じ形状のもので、刃部は原則として片面調整であり、厚刃である。25は側縁部に弧状に片面調整により刃部を作出している。刃部は厚刃である。26は一側縁に両面調整により刃部を作出している。刃部は厚い曲刃で鋸歯状を呈している。火により変色している。22～26は頁岩である。スクレイパーB類は不定形剥片を素材とし、刃部は片面調整のものが目立つ。片面調整は縄文時代前期の石器に多用されており、スクレイパーB類の多くはその段階のものである可能性が高い。

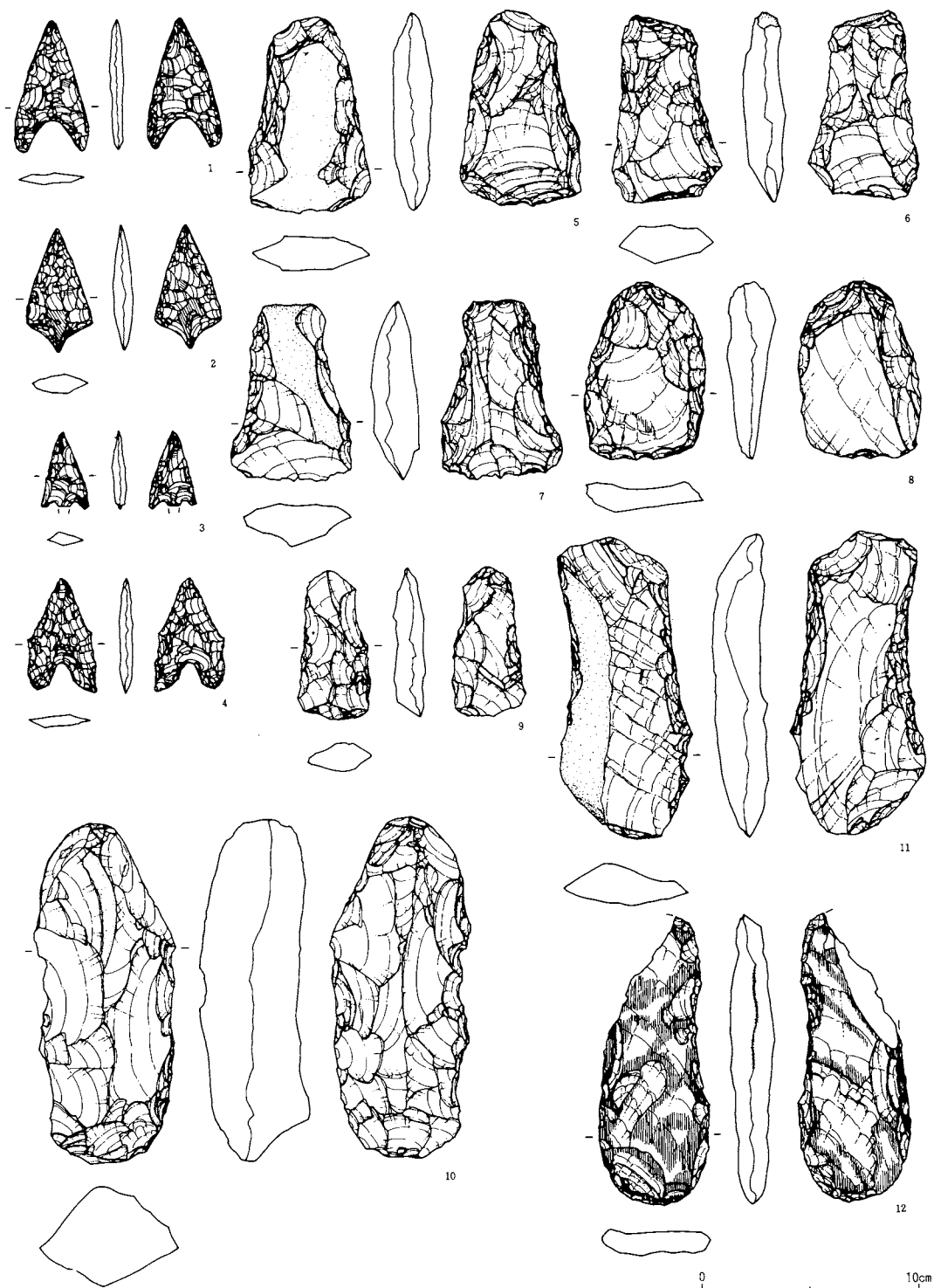
27～29は磨石である。27は楕円形を呈し両面に磨面が存在する。側縁部は敲打痕が全周する。28は長楕円形を呈し、断面は三角形となっている。磨面は両面にあり、両側縁および両端には敲打痕がみられる。29は小型の球形を呈する磨石である。磨面は顕著ではないが全面にみられる。この形態の磨石は従来見逃されることが多かったが、今後は留意する必要がある。

30、31は凹石である。30はほぼ円形で、片面に敲打による凹がみられる。表裏両面とも磨痕がみられる。側縁部は敲打痕が全周する。31は長楕円形を呈し、両面に各2箇所敲打による凹が存在する。磨痕は片面のみにみられ、一方の端部には敲打痕が観察される。石材は磨石、凹石ともすべて安山岩であり、欠損の割合は比較的少ない。

32は石皿である。縁が厚く楕円形を呈する形態のものとみられる。結晶片岩を用いている。

33は敲石であり、敲打痕は側縁部を全周する。遺跡内に多くみられた褐色を呈する安山岩の自然礫を素材としており、磨石、凹石とは石材の選択が異なっている。

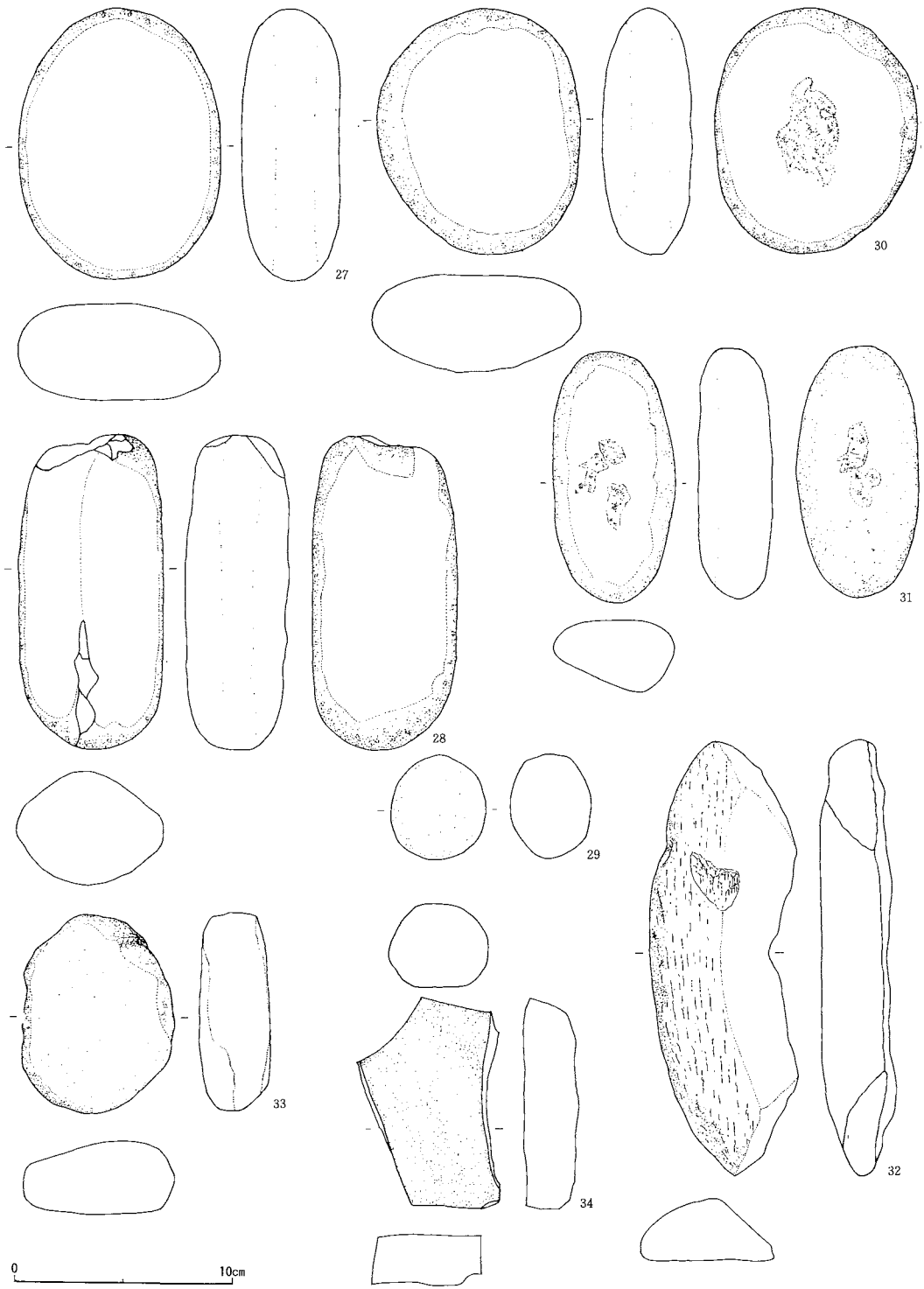
34は砥石である。砥面は2条の浅い樋状を呈している。石材は砂岩である。このほかに鑄川中流域（甘楽、吉井）に存在する牛伏砂岩を用いた砥石が多く検出されている。



第15图 石 器 (1)



第16图 石 器 (2)



第17图 石器(3)

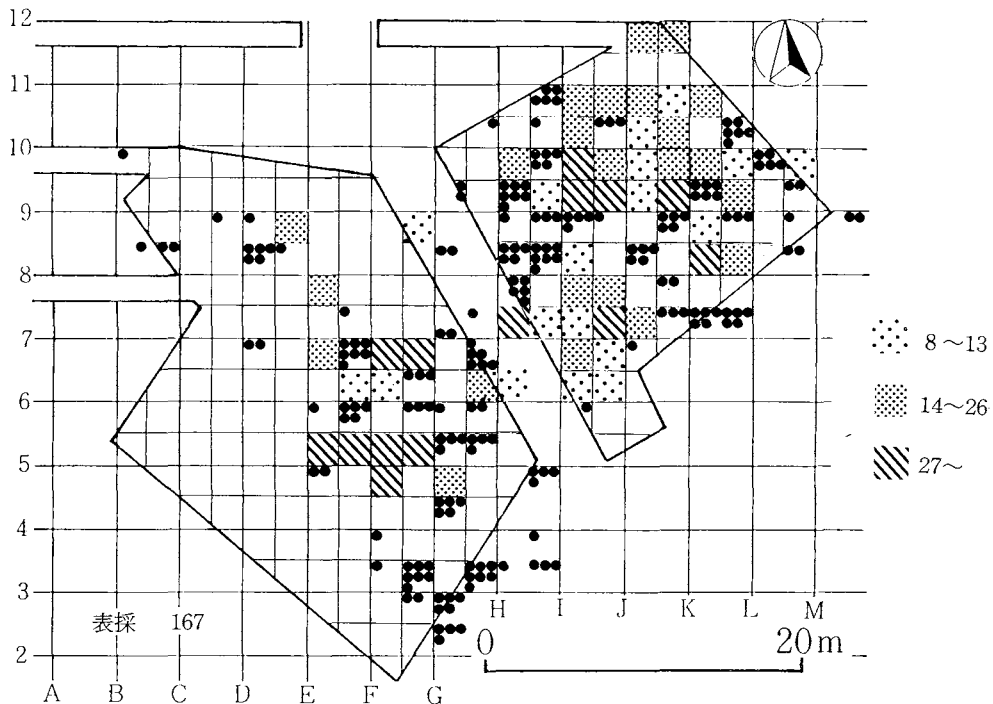
(2) 弥生時代の遺物

a 遺物の分布 (第18図)

弥生時代の遺物については、縄文時代晩期終末から弥生時代中期初頭にかけての遺物が存在するが明確に分離することができないので一括して弥生時代前期終末の遺物として扱うことにする。

遺物の分布状態をみると、Y-1号住居址、A区の2つのピット群、B区中央部東寄り、B区南端の5箇所に遺物の集中箇所が存在する。遺構の項でも述べたようにA区のピット群は住居址の可能性があり、規模、密度等遺物の集中状態もY-1号住居址と類似している。しかしB区の遺物集中箇所では遺構は検出されておらず、性格は不明である。

また土器の文様ごとの分布状態では、条痕文、無文ではこれらの集中箇所にほぼ均一に分布するが、沈線文はY-1号住居址とA区ピット群にやや偏在する。これに対して縄文を施文するのはB区の2つの集中区に多い傾向がみられる。このような偏在性が何に起因するのか現段階では明確ではないが、時間的なものにして空間的なものにして当時の社会の状態を反映していると推定される。



第18図 弥生時代中期の土器の分布

b 土器 (第19図 第20図 第21図)

1～8、17、26～28は条痕文系の壺形土器である。1～5は口辺部破片であり、口辺部に突帯を有する。突帯には押捺や刺突を施す。7、8、18は胴部の破片である。26～28は底部で底面に網代痕を有する。9～14は条線を施す深鉢形土器である。14は口唇部に押捺を施す。7、15、16、18～20は甕形土器である。地文に条線を施している一群で、18は頸部に無文部を有し、沈線で区画している。21～25は縄文を地文に施す一群である。22、23は深鉢形土器であり、22は円孔を施している。また6は条痕文系の土器であるが、胎土が他のものと異なっており他地域からの搬入の可能性がある。

30、31は浮線文系の土器であり、30は深鉢形土器である。いずれも赤色塗彩を施している。52は綾杉状の沈線を施す土器である。

29は変形工字文を主文様とする小形広口壺形土器である。口辺部に平行沈線を施し、その下に2列の列点刺突を施す。そして胴上半部に変形工字文を施し、下半部には無節の縄文を施す。38～43は変形工字文の流れをひく幾何学文様を施文する一群である。38、39は菱形連繫文を施し、40～43は三角連繫文を施文する。

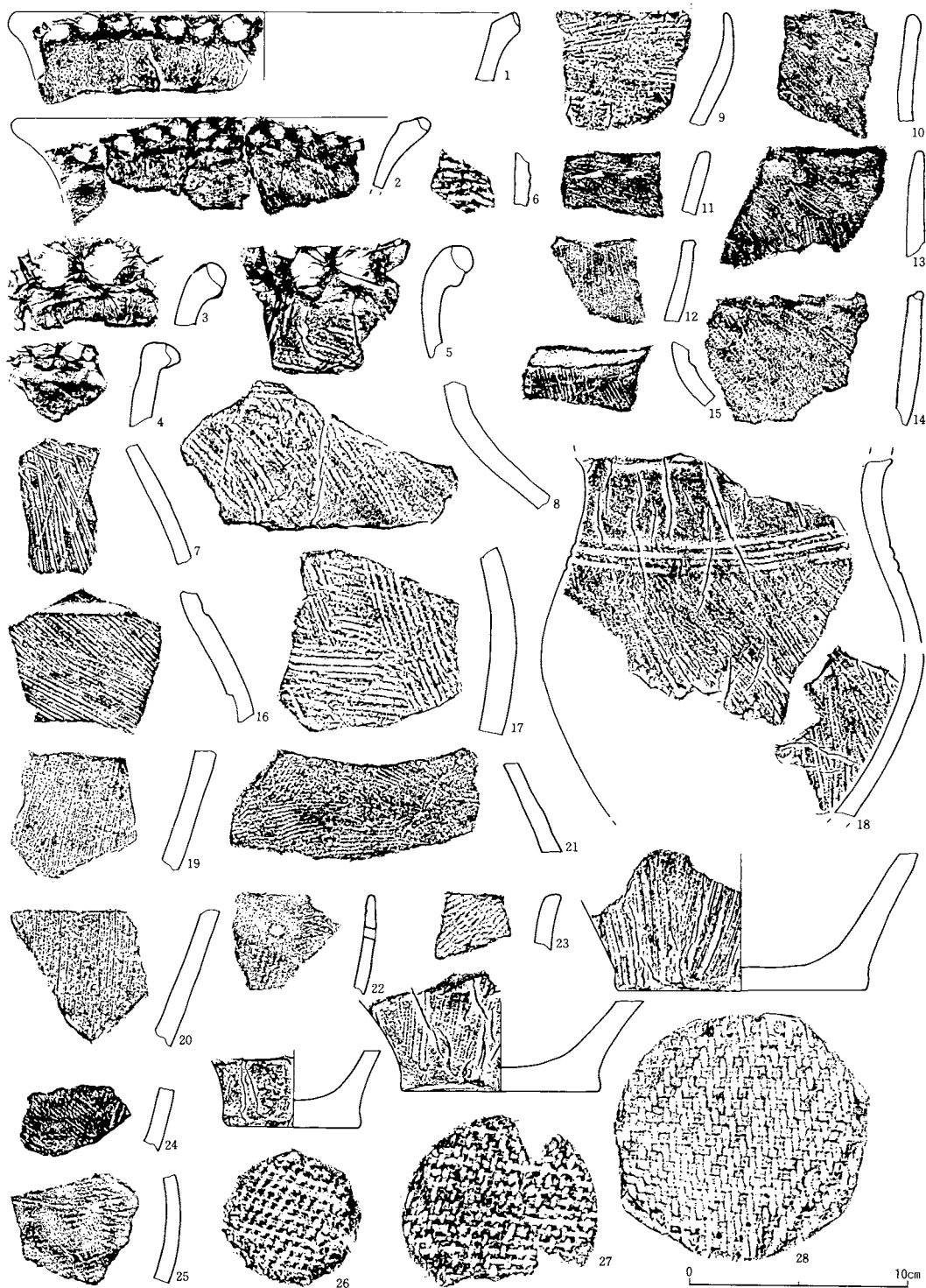
32～37は平行線を基調とし、縦方向に刻み目を施す一群である。また44～51、53、54、63～67は平行線文を施す土器群である。47～49、53、54、63は地文に縄文を施すもので、53は浅鉢形土器、54は蓋と思われる。46、64は地文に条線をもつもので、46は口唇部に押捺を施す。その他は沈線のみによって施文するものである。55～59は平行線の間列点を施す一群である。また60～62は平行線の下に刺突により連続する円孔を施す一群である。68、69は細い沈線を施文する。

70～78、84は口辺部に帯状に縄文を施す土器群である。70は深鉢形土器であり、口縁部は波状を呈する。波状部には刺突が施される。また71は壺形土器であり、口辺部には無節の縄文を施文する。71～78、84は口辺部が有段となる甕形土器であり、口縁部は波状を呈する。

79～83、87～91は口辺部が無文で口唇部または口縁部が突出する一群である。口縁部が波状を呈しその部分に押捺を施すものが多い(79～81、87、90)。90は甕形土器で胴部には沈線が施される。88、89、91も甕形土器の胴部破片である。85、86は無文で口唇部に押捺を施す深鉢形土器である。また92～96は無文土器である。93は深鉢形土器であり、他は甕形土器である。

97は浮線文の流れをひくと考えられる深鉢形土器である。施文手法は浮線文系土器と同様に削り出して文様を施文する。口辺部と胴下半部に2列に鋸歯状の浮線を施す。

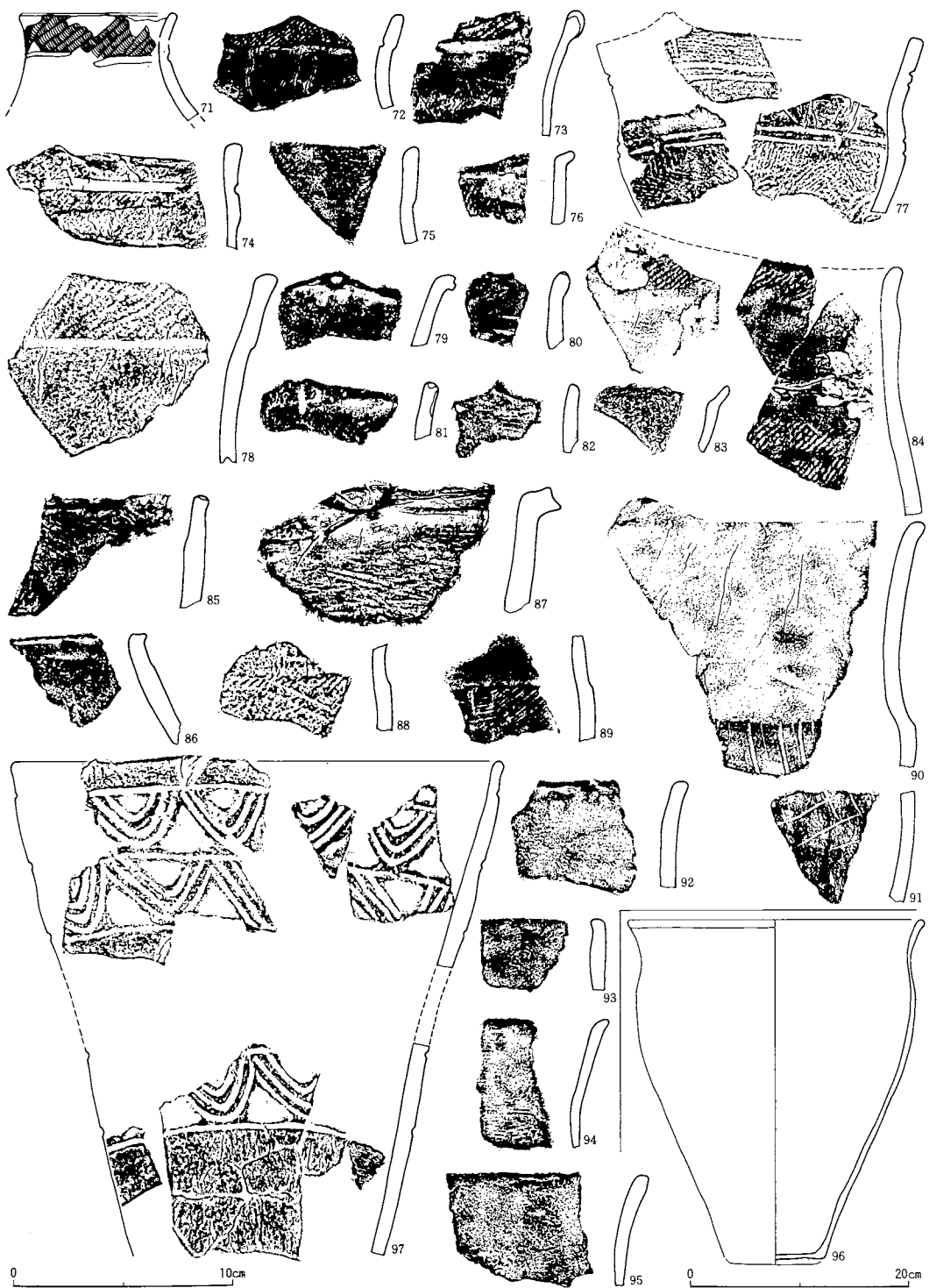
これら弥生時代の遺物については東海系、在地系、東北系の土器が含まれており、編年的位置や文化系統についての問題は資料的制約もあるので言及を避けたい。



第19图 弥生土器(1)



第20图 弥生土器(2)



第21图 弥生土器(3)

Ⅶ 成果と問題点

今回の調査により、群馬県西部地域における縄文時代前期および縄文時代晩期から弥生時代中期初頭段階の文化様相を解明するための重要な資料が多数検出された。

縄文時代前期の資料については特に前葉の土器群が多く出土しており、花積下層式と関山式に細分することができる。花積下層期と関山期では遺物の分布域が異なっており、時間的前後関係を空間的な分布状態により補完することができたと考えられる。また土器の出土量からみて花積下層期から関山期にかけて集落が発展を遂げたものとみられる。

一方、石器群についてみると、多くの石器は縄文時代前期の所産であることが明らかとなった。そして石器の器種別の分布状況から集落における石器群の動態をある程度看取することができた。打製石斧では撥形と短冊形の形態差が使用痕と遺跡内での分布状態から機能、用途の差に起因することが証明された。また従来明確に区別されることなく扱われてきた凹石と磨石についても、凹の有無と分布状態からはっきり分離することができ、別個の器種であることが明らかになった。このように石器群の分布状態から各個の器種について分析することにより、相互の関連性についても解明してゆくための糸口となると考えられる。今後の課題としては石器群だけでなく土器群との相互の関係についても明確にしてゆく必要があると言えよう。

また縄文時代前期のものともみられる良質の黒曜石の原石が8点出土しているが、これは黒曜石の流過程を解明するうえで非常に貴重な資料である。総重量は672.5gであり、1個あたりの平均重量は84.1gとなる。この量の原石からは数十個の石鏃を製作できると推定できる。注連引原遺跡は原産地と推定される和田峠から直線距離約70kmである。長距離流通石材の流過程での中継地であった可能性も考えられる。他に今回の調査では結晶片岩、チャート、牛伏砂岩といった産地が群馬県南部に限定される石材も検出されている。これらの石材は石皿、石鏃、砥石と各種の石器の素材として用いられている。黒曜石のように広範な分布域をもたず、数十kmの移動を行なう石材であり、中距離流通石材とでも言うべきものである。これらの石材の動態は当時の集落相互の関係を解明してゆくうえで重要な証拠となるものであり、今後留意しておく必要がある。

弥生時代前期終末の段階では、これまで関東地方では検出例のなかった住居址が検出されたことは特筆すべきことである。Y-1号住居址は掘り込みは確認されなかったものの炉址が検出されており住居址と認定した。この他にも住居址の可能性のある部分が2～4箇所存在しており、集落を構成していることが推定される。また東に隣接する注連引原(Ⅲ)遺跡においても集落遺跡の存在が確認されている。集落の在り方については注連引原(Ⅲ)遺跡の分析によりさらに明確化するとと思われるのでここでは言及を避けたい。

また遺構のほか多数の土器が出土している。これらの土器は大きく3つに分けることができる。東海系の条痕文系土器群と在地の浮線文系土器群、東北系の工字文系土器群であり、これらが混在して出土している。このうち工字文系土器群は少なく、浮線文系土器群でも浮線文を主とした文様構成のものは少ない。これら縄文時代晩期終末より弥生時代中期初頭の土器群については最近出土例が増加しており、さらに型式学的検討を行なってゆく必要があると考える。

参考文献

安中市史編纂委員会 『安中市誌』 1964年

井上唯雄・柿沼恵介 「入門講座弥生土器 関東・北関東1」 『考古学ジャーナル140』
1977年

新井順二・小野和之 「碓氷川流域における弥生式土器の様相」 『群馬考古通信』11 1985年
群馬県考古学談話会編 『第4回三県シンポジウム東日本における黎明期の弥生土器』1983年

中島宏他 『池守・池上遺跡』 埼玉県教育委員会 1984年

新井和之 「文様帯論・関山式土器」 『季刊考古学第17号』 1986年

麻生優・白石浩之 『縄文土器の知識I 草創・早・前期』 東京美術 1986年

柿沼恵介・右島和夫他 『分郷八崎遺跡』 群馬県北橋村教育委員会 1986年

黒岩文夫他 『中棚遺跡—長井坂城跡—』 群馬県昭和村教育委員会 1985年

茂木努 『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)平井地区』 藤岡市教育委員会 1984年

前原豊他 『柳久保遺跡群I』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1985年

古郡正志・大工原豊他 『小野地区遺跡群発掘調査報告書』 藤岡市教育委員会 1982年



第22図 調査状況



第23図 Y-1号住居址



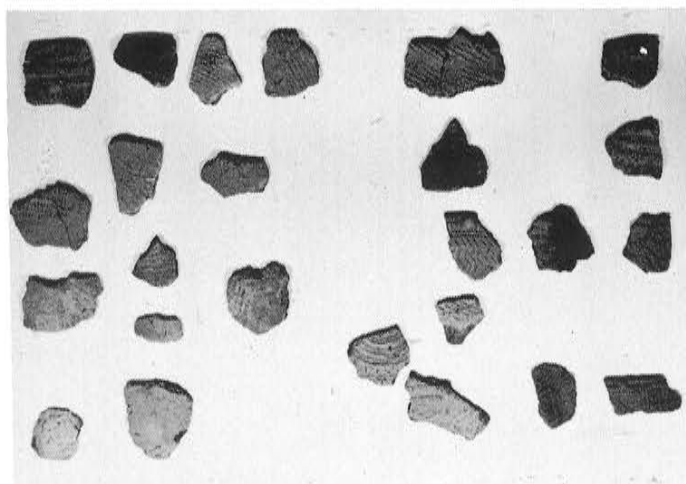
第24図 遺物出土状況



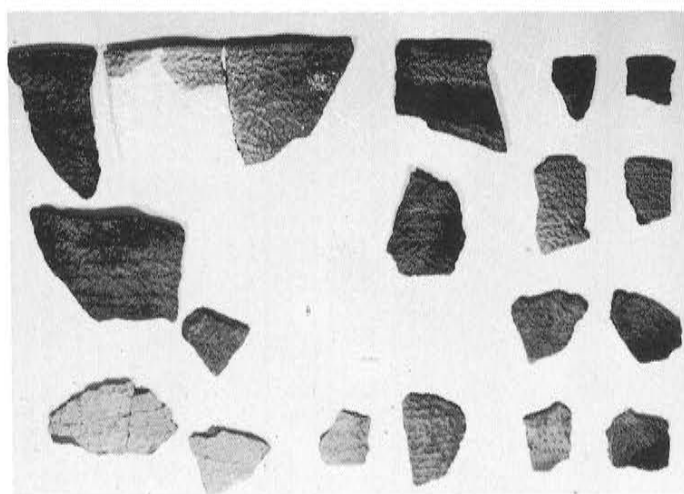
第25図 黒曜石出土状況



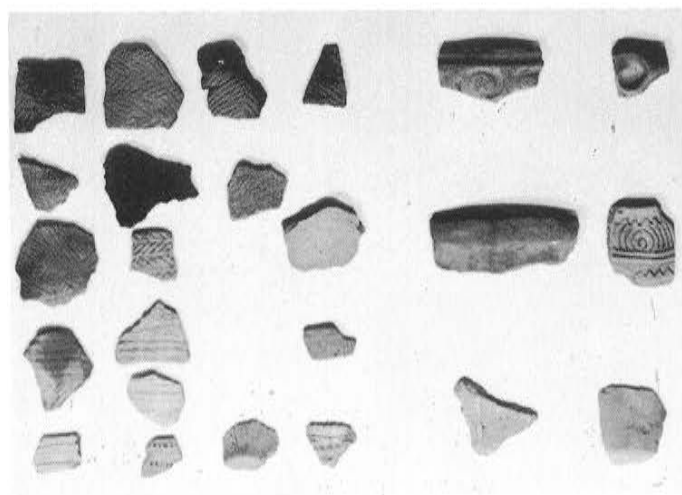
第26図 弥生時代遺物出土状況



縄文土器 (1)

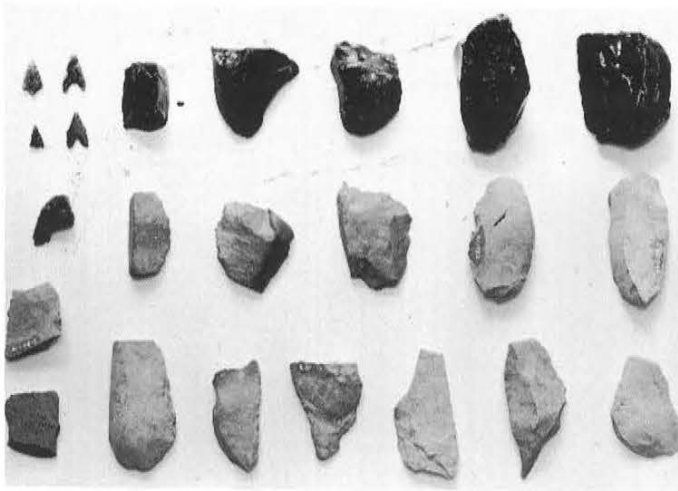


縄文土器 (2)

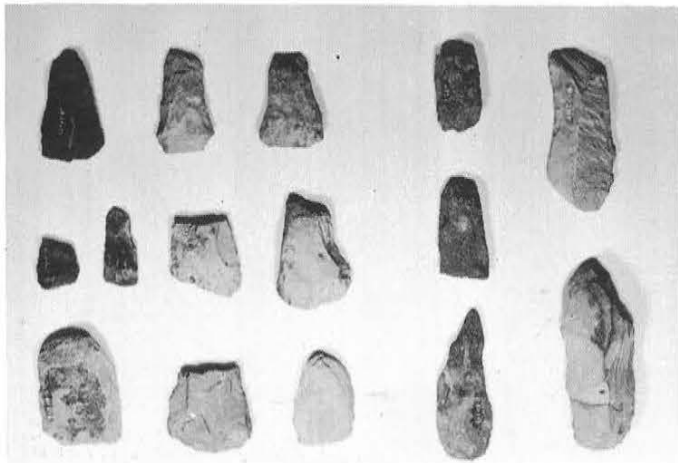


縄文土器 (3)

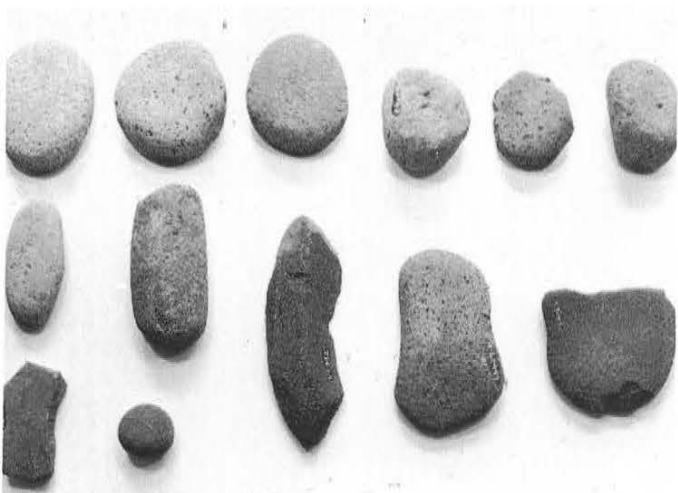
図版—4



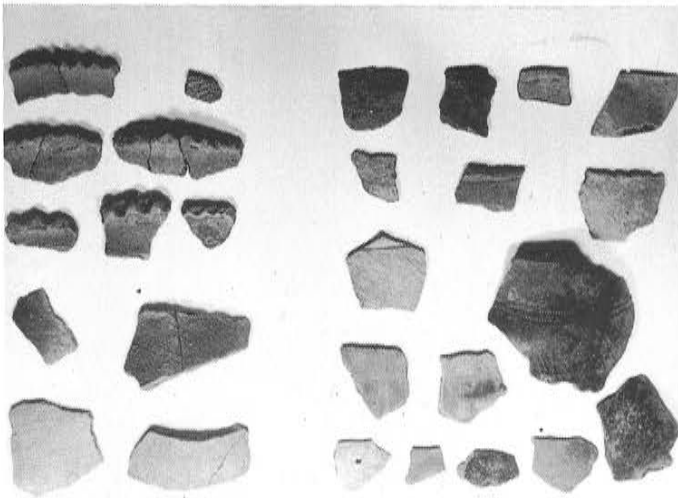
石 鑊
黒曜石原石
スクレイパー



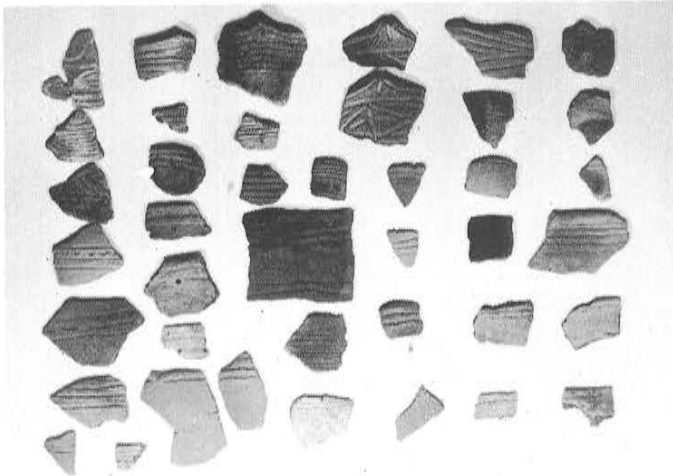
打製石斧



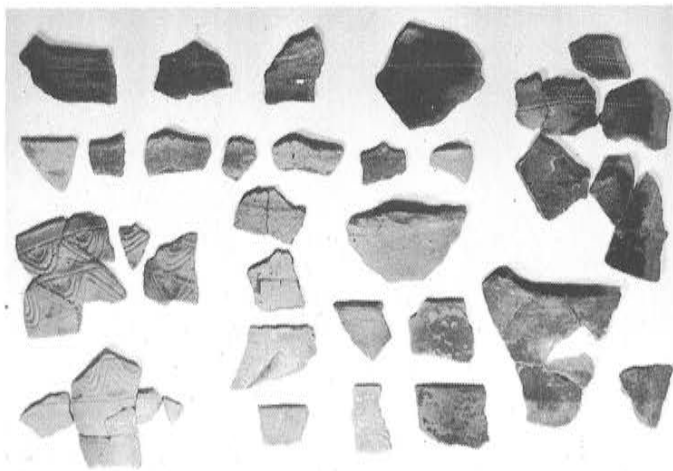
磨凹石
石
石
石皿



弥生土器 (1)



弥生土器 (2)



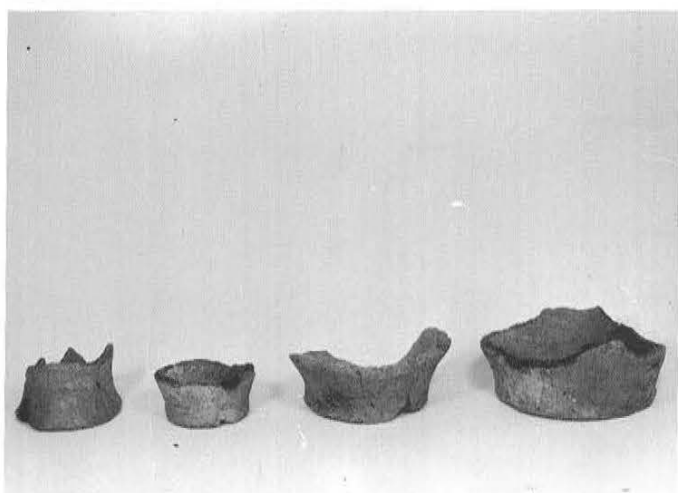
弥生土器 (3)



弥生土器 (4)



弥生土器 (5)



弥生土器 (6)

発掘調査参加者

1次調査

石井敏雄	石井久子	片桐初治	多胡千明	多胡幸男	多胡すえ	多胡正太郎
多胡民江	多胡一郎	多胡 繁	多胡房恵	多胡俊男	多胡 力	多胡いち代
多胡政子	多胡邦造	多胡栄一	多胡保男	多胡志信	多胡忠佳	多胡みづ子
多胡 操	多胡久雄	多胡穂子	多胡憲太郎			

2次調査

大谷恭子	岡田五郎	斎藤万平	斎藤三枝	須藤ダイ	田島かつ子	田村 稲
多胡好夫	多胡 静	花岡千里	湯川光子	吉井慶作		

遺物整理参加者

中島誠 斎藤説成 和田杉子 和田宏子 岩坂尚子 小川正子 小島タミエ 庭野倭子
吉沢秀子 須藤功

注連引原遺跡

発行日 昭和62年 3月31日

編集・発行 安中市教育委員会

群馬県安中市安中一丁目23-13

印刷 マツダ印刷株式会社